

第6章 「ヒストリー」とその概要

1. 「ヒストリー」の考え方

“history”という英語は歴史、歴史書、発達史、変遷、来歴、沿革などと訳されます。語源は「知ること、調べることで得た知識」というギリシャ語といわれます。松江市は調査研究を重ね知りえた事実を使って物語にすることを、historyの語源に重ねて「ヒストリー」と呼びます。今後の調査研究によりあらわれてくる成果も大きな要素として含みこんでいくとともに松江市という行政単位を越えて関連する地域の文化財ともネットワークで結ぶことを構想します。(第5章より再掲)

「ヒストリー」を紡ぐために、松江市は調査研究に力を入れていきますが、市民の皆様が参加する調査研究や他地域の研究者の協力を仰ぐことにより、その厚みが増していきます。これから列挙する「ヒストリー」は完成形ではなく、多くの人々がかかわることで更新され、また新たな「ヒストリー」が生まれることが想定されます。行政では、文化財の保存・活用、観光振興、地域振興、産業振興などの事業や、事業に取り入れられる文化財・歴史文化が「ヒストリー」に根ざしたものになることにより、魅力が高まったり、新たな魅力が生まれるようにします。各施策を通じて、市民の皆様にヒストリーが共有されることにより松江の価値が高まり、松江市民による地域づくりにつながり、継続的な関係人口の増加につながっていくことを目指します。

具体的には、①松江の歴史文化を伝える手段(ツール)として、②今後の調査研究テーマとして、③活用の素材として(地域振興素材、教育素材、産業振興素材、観光素材として)、「ヒストリー」を生かしていきます。

2. 「ヒストリー」の構成

松江には多くの文化財があり、それらを通じて豊かな地域像を物語ることができます。一つ一つの文化財を線で結んで、面を作ることで特色ある歴史文化のストーリーを形作ります。ストーリーは一つの時代、一つの空間、一つの事柄などで完結します。ストーリーは互いに関連性を持たせることで、時代に厚みが増し、空間や事柄の幅が広がります。ストーリー同士をつなぎ、第3章で述べた8つの視点を基本視座としながら、ヒストリーを紡いでいくこととなります。

松江市は、中心市街地南側の「八雲立つ風土記の丘」周辺を島根県教育委員会と調査・整備を進めてきました。また松江城天守国宝指定を機に、堀尾氏に関わる県内外の市町と共同研究を行い、成果を上げてきました。まずは、現在進行中の2つの事業を「ヒストリー」として再構成し、今後の計画実践のための基盤としていきます。

次に、松江にある重層的で幅広い歴史文化とそれに関わる文化財を活用していくために、文化財をつないだストーリーとそれをつなげたヒストリーの積み上げが必要となります。これから紡いでいく「ヒストリー」を例示し、市民の皆様とともに調査研究を実施していくなかで成長させていきます。

さらに、さまざまな地勢の異なる地域が融合した松江は、地域単位ごとに特徴的な文化財が存在し、それぞれにストーリーがあります。地域の悉皆的調査を基盤として、大きな松江の歴史文化をつむぐヒストリーを構想します。

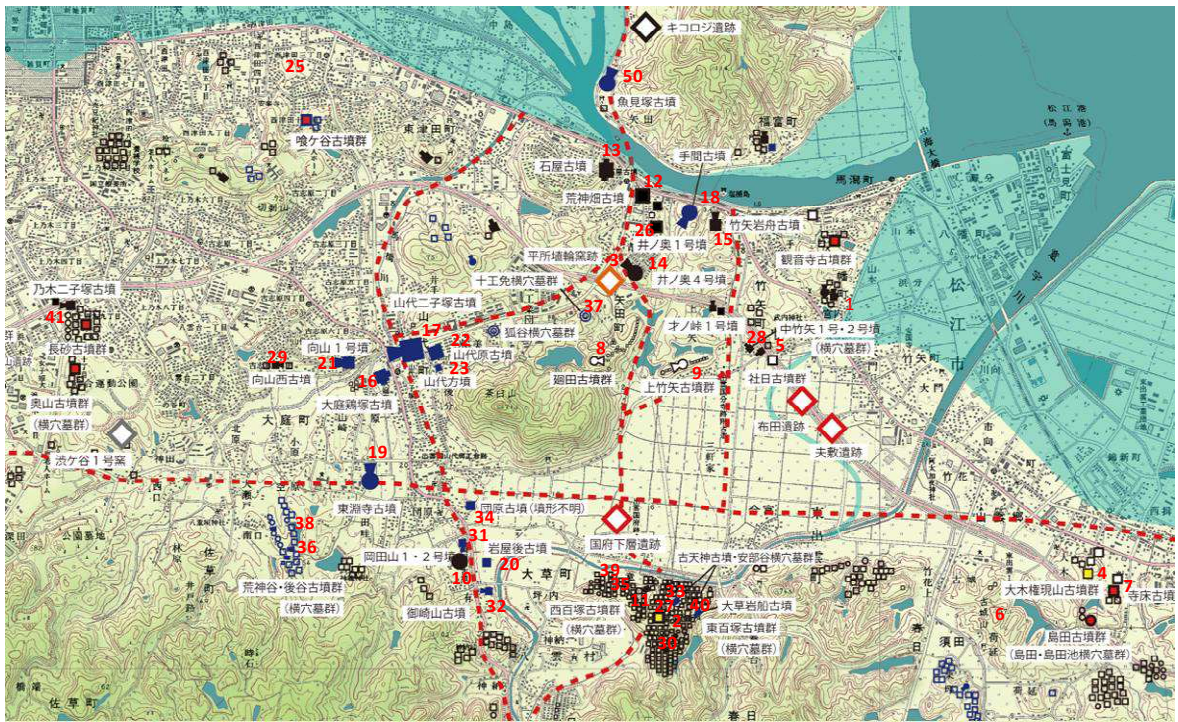
3. これまでの調査研究成果から紡がれる「ヒストリー」

ヒストリー	ストーリー
1) 古代出雲の王墓のヒストリー 【視点 4) 古代出雲文化発祥の地 松江】	ア) 四隅突出墓と方墳のストーリー(1世紀~4世紀前半)
	イ) 前方後円墳(廻田1号墳)の登場と出雲トップへの道のヒストリー
	ウ) 方墳と形象埴輪のストーリー
	エ) 古墳時代後期の前方後方墳のストーリー
	オ) 古墳時代終末期の石棺式石室のストーリー
	カ) 周辺地域の古墳から見えるストーリー
2) 堀尾氏入国とまちづくりのヒストリー 【視点 2) 城下町 松江】	ア) 松江城築城と城下町形成のストーリー
	イ) 堀尾氏ゆかりの城館を辿るストーリー
	ウ) 堀尾吉晴とその一族の石塔のストーリー

1) 古代出雲の王墓のヒストリー

松江市街南郊の八雲立つ風土記の丘周辺には数多くの古墳があります。国・県指定史跡だけでも14件含まれています。これまでの松江市や島根県の調査研究により、4世紀後半から7世紀前半まで約300年間にわたり、東部出雲・出雲の大首長の代々の墓が時代を追って分かるようになりました。大首長を支えた人の古墳も含め、古墳の変遷の意味付けを具体的に行い、葬られた人物の姿が思い浮かべられるようにします。

さらに、同時代の松江市内の首長との関係、出雲地域の中での首長との関係、ひいては大王墓と



松江市街地の南郊には、4世紀後半の廻田1号墳を端緒に、出雲最大級の古墳（大首長墓）が7世紀半ばまで連続して築かれます。その形や内容は時代によって変化しますが、それはヤマト王権との関係と出雲内部の地域間関係の中で変化しました。このような古墳のあり方は、出雲の他地域や隣接地域、近畿地方、遠くは九州や関東の豪族も関わっていたことがわかっています。

の関係などにも広げ、大きな視点で松江の古墳の歴史を感じてもらいます。基本的な調査研究は、島根県古代文化センターや島根大学はもとより、関連地域とも連携し、協力して情報発信や整備を進めることで相乗効果を狙います。

ア) 四隅突出墓と方墳のストーリー（1世紀～4世紀前半）

弥生時代後期（1世紀頃）に、それまで集団祭祀の象徴だった銅鐸や銅剣などの青銅器が姿を消し、出雲では四隅突出墓という集団の首長を葬る墓のまつりが生み出されます。後期後半（2世紀後半頃）には出雲市の西谷墳墓群や安来市の荒島墳墓群で、長辺が40mを超えるような同時代の日本列島で最大級の四隅突出墓が造られます。松江周辺では、10～25m程度の中小規模の四隅突出墓が小地域ごとに造られており、小地域を束ねる有力な首長が各地で生まれていたことがわかります。

3世紀の中ごろ（古墳時代初期）にヤマトに巨大な前方後円墳が生まれ、日本列島各地に同様の墳墓が造られることで、のちの国家の前身となる大きなまとまりができたと考えられます。出雲では、弥生時代以来の伝統的な四角い形の古墳（方墳）を造り続け、荒島墳墓群に60mクラスの大規模方墳が築かれます。松江周辺では、弥生時代に続いて中小規模の方墳が築かれました。出雲でN0.2クラスを保ち続けたとも考えられます。

イ) 前方後円墳（廻田1号墳）の登場と出雲トップへの道のストーリー

古墳時代前期後半（4世紀後半頃）、茶臼山の東の山上に全長62m、当時の出雲最大の前方後円墳、廻田1号墳が現れます。出雲で初めての前方後円墳で大和北部の特徴を持つ円筒埴輪が立てられた

古墳です。ヤマトと最も関係性の深い地域が、荒島から松江南郊の意宇おいうに変わったともいえます。その後、古墳時代を通じて出雲の中心部の地位を、意宇の地が担うこととなります。

ウ) 方墳と形象埴輪のストーリー

古墳時代中期、5世紀になると大橋川をはさんで南北に、大型の方墳が現れます。西尾町のびようしよ廟所古墳、観音山1号墳、東津田町の石屋古墳、矢田町のこうじんぼた荒神畑古墳、井ノ奥1号墳などがそれで、古曾志町のたんげあん丹花庵古墳や法吉町の塚山古墳も同様の例です。これらは30mから最大60mを超える大型方墳で、同じ時期の畿内地方の大王墓に伴うぼいちよう陪冢（主墳に付属する古墳）の形と連動しているという理解が有力です。中央の大王の側近・重臣的な役割を担っていたかもしれませんが。あわせて、精巧な形象埴輪が古墳のマツリに用いられることも重要です。特に石屋古墳からは、当時の最高の技術で作られた馬や家、楯、武装した人物、力士、玉座に座る人物などの埴輪が出土しています。力士などの人物は地方では最古級の埴輪で、『日本書紀』に出雲の野見宿禰のみのすくねが陪葬の代わりに土製の人物を並べることを考案したとする埴輪創出伝承との関わりも注目されます。



石屋古墳出土の形象埴輪

中国の歴史書によると、5世紀には当時の日本である倭から5代の王が外交を求めて朝貢したとされます。「倭の五王」と呼ばれる国際化に対応した時代の大王墓は、世界遺産となった百舌鳥・古市古墳群と言われており、出雲の中心地とのかかわりを探るストーリーです。

ヒストリーに直接かかわる古墳一覧表					
	首長墓級		その他の古墳		
1	的場墳墓	四隅突出？	25	東城の前墳墓群	四隅突出
2	東百塚山20号墓	四隅突出	26	井の奥1号墳	前方後円墳
3	間内越墳墓群	四隅突出	27	東百塚山1号	方墳
4	大木権現山墳墓	四隅突出	28	中竹矢1号墳	前方後方墳
5	社日1号墳	方墳、木槨ほか	29	向山西古墳	前方後方墳
6	古城山1号墳	方墳	30	大草岩船古墳	前方後方墳、石棺
7	寺床1号墳	方墳	31	岡田山1号墳	前方後方墳、横穴式石室
8	廻田古墳	前方後円墳	32	御崎山古墳	前方後方墳、横穴式石室
9	上竹矢1号墳	前方後円墳	33	古天神古墳、	前方後方墳、石棺式石室
10	岡田山1号墳	円墳	34	団原古墳	方墳？、石棺式石室
11	西百塚山19号墳	円墳	35	東西百塚山古墳群	前方後方墳、方墳他
12	荒神畑古墳	方墳	36	荒神谷・後谷古墳群	前方後方墳、方墳
13	石屋古墳	方墳、形象埴輪	37	十王免横穴群	横穴墓群
14	井の奥4号墳	前方後円墳	38	荒神谷後谷横穴群、	横穴墓群
15	竹矢岩船古墳	前方後方墳、石棺	39	西百塚山横穴群	横穴墓群
16	大庭鶏塚古墳	方墳	40	安部谷横穴群	横穴墓群
17	山代二子塚古墳	前方後方墳			
18	手間古墳	前方後円墳	41	乃木二子塚古墳	前方後方墳
19	東淵寺古墳	前方後円墳	42	田和山1号墳	前方後円墳、横穴式石室
20	岩屋後古墳	方墳？、石棺式石室	43	増福寺裏山古墳群	方墳他
21	向山1号墳	前方後方墳、石棺式石室	44	雨乞山古墳	方墳、石棺式石室
22	山代方墳	方墳、石棺式石室			
23	山代原古墳	方墳、石棺式石室			

エ) 古墳時代後期の前方後方墳のストーリー

5世紀の終わり頃、出雲東部の首長墓は、この時期には全国で唯一、前方後方墳を採用します。中央では雄略朝の時期にあたり、地方の首長たちを「人制」と呼ばれる制度に組み込む政策がすすめられた時代です。そうした古墳の変動期に、出雲意宇の首長たちは独自の古墳の形で地域の連合関係を強めました。ヤマト政権からは、他地域とは違う形の古墳を作ることが容認されたとも言えます。

6世紀になると、^{けいたい}継体天皇、^{きんめい}欽明天皇の時代を通じて、^{こくぞう}国造制、^{べみん}部民制といった制度による地方や豪族の統治が進んでいきます。6世紀半ばころに築かれた全長94mの巨大前方後方墳、山代二子塚古墳はこの地域の国造（中央から任命された地方長官）だった可能性が高いと考えられます。山代二子塚は新たに出雲型子持壺のマツリを取り入れるなど、出雲東部の中の豪族たちを束ねる古墳のマツリを作り出し、地域内の結合の強化を図った記念碑的古墳と考えられます。彼らは中央で絶大な権力を持った蘇我氏との関係性も強めながら、地域の中での力を高めていったと考えられま



山代二子塚古墳



岩屋後古墳石棺式石室

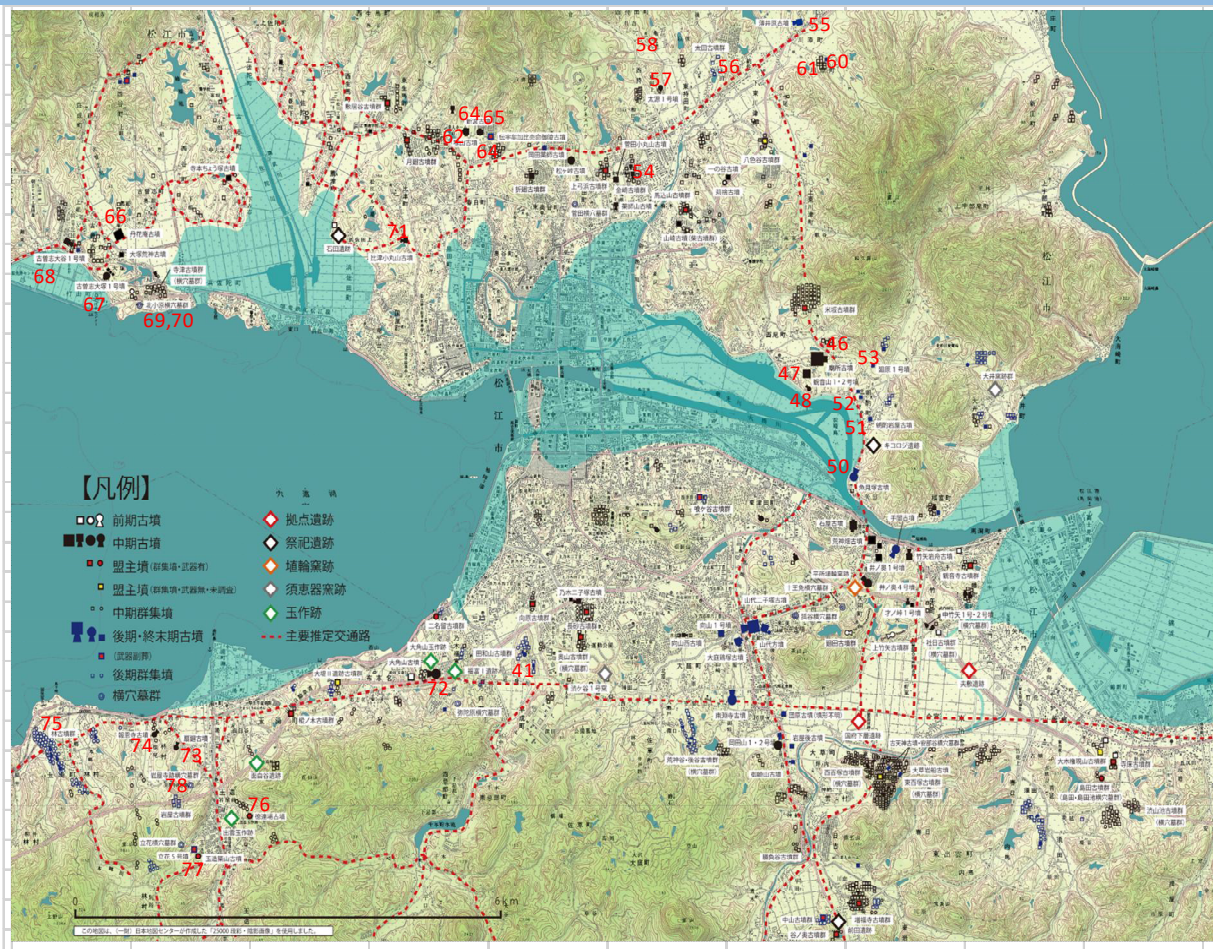
す。

オ) 古墳時代終末期の石棺式石室のストーリー

6世紀末頃、「意宇国造」一族の首長たちは、「石棺式石室」という特徴的な石室を編み出し、古墳の埋葬施設として取り入れます。前項で述べた子持壺と相まって、石棺式石室はおよそ半世紀にわたり、意宇の領域の中で首長墓として続き、地域豪族連合の結束を表し続けます。6世紀後半頃に新たに表れた出雲西部の新興勢力への影響力も強めていき、7世紀前半には「出雲国造」に成長したと考えられます。7世紀の終わり頃には、意宇平野の南に出雲国府がおかれ、8世紀半ばには出雲国分寺が建立されたのです。

カ) 周辺地域の古墳から見えるストーリー

王墓が築かれ続けた中心地としての松江市南郊は、その地域だけで成り立っていたわけではありません。中海、大橋川、宍道湖をはさんで、その北岸地域や東西に隣接する地域との関係性の中で、中心としての役割を担っていきます。



出雲中枢の周辺にある主要古墳分布図

ヒストリーに関連する、周辺地区の古墳一覧表

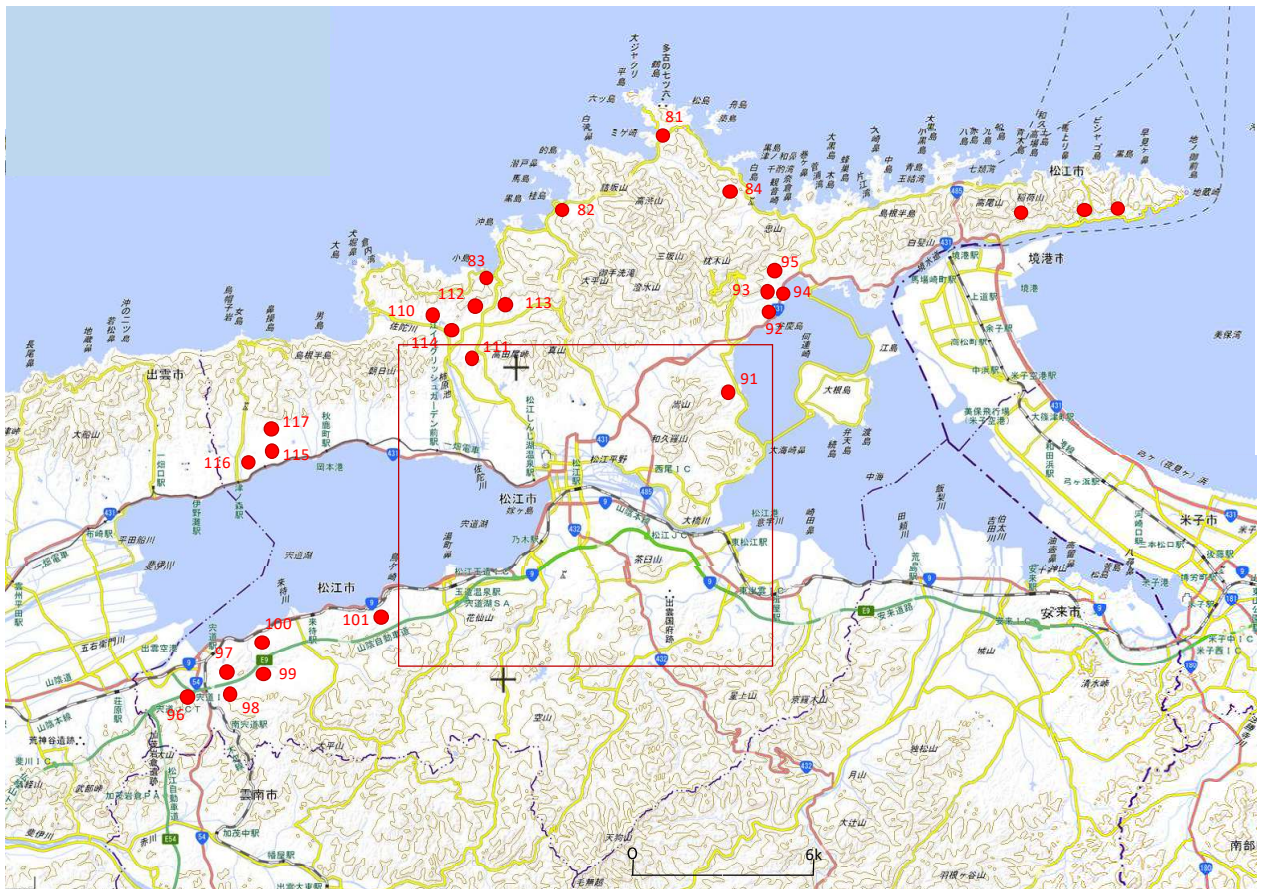
朝酌地区		川津・持田地区		
46	廟所古墳	方墳	54 金崎古墳群	前方後方墳、方墳
47	観音山1号墳	方墳	55 薄井原古墳	前方後方墳
48	観音山2号墳	前方後円墳	56 太田古墳群	方墳
49	米坂古墳群	方墳他	57 太源1号墳	円墳
50	魚見塚古墳	前方後円墳	58 日吉垣ノ内古墳	石棺式石室
51	朝酌岩屋古墳	方墳	59 金毘羅谷古墳	方墳
52	朝酌小学校古墳		60 西宗寺古墳	方墳
53	廻原1号墳	方墳	61 川原古墳	方墳
法吉・生馬地区		古江地区		
62	塚山古墳	方墳	66 丹花庵古墳	方墳
63	田中谷古墳	前方後方墳	67 古曾志大塚古墳群	円墳、方墳
64	伝宇牟加比売陵古墳	方墳	68 古曾志大谷1号墳	前方後方墳
65	新宮古墳	円墳	69 北小原古墳群	方墳
			70 北小原横穴墓群	横穴墓

中海・宍道湖北岸地域は、弥生文化の導入期からいち早く水田稲作をはじめ、拠点集落を営んでいました。古墳時代に入っても、日本海や中海・宍道湖に面して交通の要衝にあり、比較的大規模な前方後円墳や円墳、方墳を築いてきました。古墳時代前期（4世紀）には大野地区や鹿島地区に大型古墳が築かれていましたが、中期（5世紀）には古曾志周辺と朝酌周辺に大型方墳が築かれ、同様の古墳を作る松江市南郊地域と強く結びつきました。その関係はその後も続き、6世紀に任命される国造の最も近いパートナーであり続けたのです。

ヒストリーに関連する松江市全域の古墳一覧表

日本海沿岸地域		中海北岸・東岸ゾーン (美保関地区)			
81	亀田横穴墓群	横穴墓	85	天神社裏山古墳群	円墳、石室
82	牛谷古墳	方墳、石棺	86	海崎古墳群	方墳、石室
83	宮尾横穴墓群	横穴墓	87	法田峠古墳群	方墳、石室
84	岩山古墳群	方墳、横穴式石室			
中海北岸・東岸ゾーン (本庄地区)		宍道湖南岸ゾーン (宍道地区)			
91	八日山古墳	方墳	96	上野古墳群	円墳、方墳
92	山ノ神古墳群	前方後円墳、方墳、円墳	97	才横穴墓群	横穴墓
93	測切古墳群	前方後円墳、前方後方墳	98	水溜古墳群	方墳
94	藤田古墳群	前方後円墳、前方後方墳	99	椎山1号墳	前方後円墳
95	善尾古墳群	方墳	100	伊賀見1号墳	石棺式石室
			101	鏡北廻古墳	石室
宍道湖北岸ゾーン (鹿島地域)					
110	名分丸山古墳	前方後方墳	114	鶴灘山古墳群	前方後円墳、円墳、方墳
111	奥才古墳群	方墳、円墳	115	大垣大塚古墳群	方墳、円墳
112	講武岩屋古墳	石棺式石室	116	平廻古墳	前方後方墳
113	堀部古墳群	前方後円墳、方墳	117	鍛冶屋谷古墳群	円墳

松江市南郊地域の西側、宍道湖南岸ゾーンは、中海・宍道湖北岸地域とはやや異なる動きをします。特に玉湯町周辺は、古墳時代の初めころから玉作を始めることもあって、石棺を重視するなど独自の古墳を築きます。しかし6世紀終わり頃には、南郊地域と共通する石棺式石室を首長墓に取り入れるなど、出雲東部の大きな枠組み中に取り込まれていきました。



2) 堀尾氏入国とまちづくりのヒストリー

現在の松江城下町と周辺地域の歴史的風致の形成は、17世紀初頭に堀尾氏が出雲国、隠岐国を与えられて富田城に入り、慶長13年（1608年）に松江に居地を移して、松江城とその城下町を形成したことが大きな契機となっています。松江城下町の基本的構造は、堀尾期に形成され、現在もその地割りや普請の痕跡がよく残っています。城下町の文化財は「歴まち計画」でさまざまな歴史的風致と旧城下町エリアとして重点区域に位置づけられています。

一方で堀尾氏は松江城築城までには富田城に入り、築城後も富田城をはじめ三刀屋城、赤名瀬戸山城、三沢城などを支城として構え、出雲国の支配を行っていました。また中世以来の伝統的な寺社勢力とも手を結び、杵築大社（出雲大社）の慶長14年の造営にも大きく力添えをしています。また松江城築城を知るには入国以前の堀尾氏の歴史が深く関わります。出雲入国前に領していた浜松や出生地の大口町などの関連文化財が重要な手がかりです。松江市だけではなく、県内外の自治体や機関と共同研究を進め、お互いにつながりが分かる情報発信や整備を行うことで、広がりを持ったヒストリーを紡ぎ、活用を進めます。

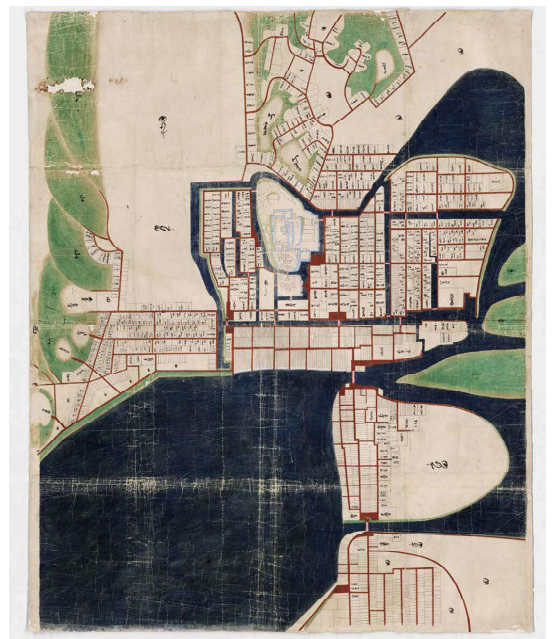


堀尾吉晴公共同研究会報告書

ア) 松江城築城と城下町形成のストーリー

堀尾吉晴が亀田山に松江城の築城を開始したのが慶長12年（1607）からで、城下町の造成も城造りと平行して行われました。慶長16年（1611）には天守を始め、城と城下町の大半ができあがったと考えられます。城はその後大きな普請は行われていないため、堀尾期の姿をおおむね留めていると考えられます。

当時の松江城と城下町の様子は、「堀尾期松江城下町絵図」で知ることができます。城普請のために、末次に向けて南北に延びていた丘陵を赤山と亀田山に分断して内堀とし、城下町全体を堀で区画して大枠を形作りました。この堀割は、現在の松江城下のまちなみを潤すとともに、観光のツールとして大きな役割を担っています。城下町形成の詳細は、発掘調査により明らかになってきています。城下町東端の田町川の外側には、「堀尾期松江城下町絵図」で描いてあるとおり



堀尾期松江城下町絵図
（島根大学附属図書館蔵）

に土手が見つかり、湿地帯にシダ類タケ、カヤ、マツなどを敷いた上に土を盛って作られていることが分かりました（敷葉工法）。城下町内部は、素掘りの大溝、区画境大溝、屋敷境大溝を順に掘り進め、町割り区画を溝で区切り、道路や屋敷地内は盛り土をして造成しています。堀尾吉晴は、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕え、戦国時代から安土桃山時代の最先端の築城に関わって来たことで得た城普請のノウハウを用いて、現在に至る町の基礎を形作ったのです。



城下町遺跡の発掘で出てきた東端の土手の跡



松江歴史館部分の発掘調査風景



松江城東側の内堀（亀田赤山の割りり）

イ) 堀尾氏ゆかりの城館を辿るストーリー

堀尾吉晴は尾張国丹羽郡御供所村（愛知県丹羽郡大口町）で生まれ、堀尾氏邸宅跡（発掘調査され保存整備されています）で青年時代を過ごします。のちの豊臣秀吉に仕え、築城にかかわるよう



遠江国（静岡県）で堀尾吉晴が築いた城



愛知県大口町、堀尾氏邸宅跡

になったのは近江の長浜城です。琵琶湖沿岸に新しく形作られた城と城下町を目の当たりにし、築城技術にも触れました。やがて明智光秀亡き後の丹波黒井城へ入り、初めて城と城下町を自ら支配しました。天正13年（1585）に吉晴は豊臣秀次の宿老として近江国佐和山城に入城しました。天正18年（1590）年の小田原の戦い後は、遠江国浜松12万石を任せられるようになりました。吉晴は前

代の徳川家康の時の「土の城」から、石垣の城に変貌させたと考えられます。また支配地の交通の要衝に、支城として二股城、鳥羽山城を築きました。

慶長5年(1600)の関ヶ原の戦い後、吉晴は徳川家康より出雲・隠岐両国24万石を賜り、安来市富田城へ入城します。富田城在城期間中にも、城の改修を行い、麓に城下町を築きました。当時の城下町の様子は、富田川河床遺跡の発掘調査により知ることができます。やがて吉晴は松江を支配の拠点と定め、松江城築城を始めると同時に、

出雲国内の支城として三刀屋城と赤名瀬戸山城の改修も行いました。おわりくにござしよ尾張国御供所村の土豪の方形区画の居館で生まれた吉晴は、信長、秀吉、家康に仕え、合戦、政治、築城に携わり、戦国時代の武士として最先端の技術と向き合い、実践しながら経験を積んできました。その集大成が松江城とその城下町だったのです。



浜松城天守台と模擬天守



堀尾吉晴が設けた出雲の居城と支城



富田城跡



三刀屋城天守台跡

ウ) 堀尾吉晴とその一族の石塔のストーリー

堀尾氏にかかわる石塔は、松江周辺、雲南市三刀屋町、安来市広瀬町を中心に数多く残されています。堀尾一族の石塔は五輪塔、宝篋印塔といわれるものが大多数で、周囲を石の壁と屋根で覆っ

た石廟と呼ばれる丁寧なしつらえのものも見られます。堀尾氏が出雲に入って以降、石塔の多くは来待石に集約され、特徴的な形の宝篋印塔ほうきょういんとうが数多く作られるようになります。堀尾氏の出雲入部をきっかけとして、遠江国浜松を祖型として、組織化された石工集団により来待石を使った石塔政策に変化したものと考えられます。

堀尾氏は出雲国内のほか、京都、高野山、江戸に一族の墓所をおき、数多くの石塔を建立しました。墓所や石塔の在り方は、堀尾吉晴とその一族の精神性を色濃く反映したものとと言えます。京都では妙心寺春光院に堀尾家墓所があります。堀尾吉晴は、小田原攻めの時に陣中で病没したと伝えられる息子金助の菩提を弔うために妙心寺に俊厳院を創建し、のちに改称して春光院となっています。来待石の石塔が13基あり、わざわざ出雲から運ばれたものです。高野山奥之院に堀尾家墓所があり、13基の石塔が確認されています。これらの石塔群は、堀尾吉晴、忠氏の出雲国入府後に、堀尾家当主及びその一族のために建てられたものです。江戸の養源寺本堂裏に堀尾氏関係の5基の石塔が残されています。堀尾氏にとって、養源寺は仮の菩提寺としての性格があったものと考えられています。

没年	人物名	戒名	墓所									
			広瀬		松江		玉湯	三刀屋	赤名	京都	高野山	江戸
			嚴倉寺	富田城内	圓成寺	慈雲寺	報恩寺	(殿棟墓)			春光院	奥之院
1599 (慶長4)	堀尾泰晴	天徳院殿高菴世崇大居士◆								宝篋印塔		
1604 (慶長9)	堀尾忠氏	忠光院殿天軸世球大居士◆					宝篋印塔			宝篋印塔▲	五輪塔	
1607 (慶長12)	堀尾泰晴妻	龍翔院殿芳嶽宗龍大姉◆								宝篋印塔		
1608 (慶長13)	堀尾勘解由	桂岩院殿祥雲世端大居士◆		宝篋印塔							宝篋印塔	
1611 (慶長16)	堀尾吉晴	法雲院殿松庭世栢大居士◆	五輪塔							宝篋印塔▲	五輪塔	
1611 (慶長16)	奥平家昌妻	法明院殿慧光正圓大禪定尼◆								宝篋印塔▲		
1614 (慶長19)	奥平家昌	六通院殿天眼道高大居士◆								宝篋印塔▲		
1618 (元和4)	堀尾吉晴娘 〔勝山〕	靈照院殿高月宗松大禪定尼◆									五輪塔▲	
1618 (元和4)	堀尾吉晴娘 〔三刀屋〕	清涼院殿金壹宗蓮大禪定尼◆										
1619 (元和5)	堀尾吉晴妻	昌徳院殿俊芳宗英大姉◆								宝篋印塔▲	五輪塔▲	
1620 (元和6)	堀尾民部	實山榮眞大居士※					宝篋印塔				宝篋印塔	
1627 (寛永4)	堀尾忠氏妻	長松院殿眞諦紹聖大姉◆								宝篋印塔▲		
1627 (寛永4)▲	堀尾采女母 または妻▲	芳□妙□大姉※									五輪塔▲	
1632 (寛永9)▲	牧志摩	慈眼院日雄大居士※				宝篋印塔						
1633 (寛永10)	堀尾忠晴	圓成院殿高賢世肖大居士◆			五輪塔					無縫塔▲	五輪塔	宝篋印塔
1633 (寛永10)	松村監物	大恕玄忠居士◆								舟形石塔▲	五輪塔	宝篋印塔
1634 (寛永11)	堀尾忠晴娘	法光院殿玄貞全大姉◆									宝篋印塔	宝篋印塔
1636 (寛永13)	堀尾頼母助政家	為□□院 切岩□□□※									宝篋印塔	
1644 (寛永21)	堀尾但馬	最勝院殿天叟世光居士※			五輪塔							
1644 (寛永21)	堀尾采女	大用淨輔居士※										宝篋印塔
1650 (慶安3)	堀尾忠晴妻	雲松院殿長天正久尼大姉◆										
1667 (寛文7)	堀尾但馬妻	慈堂良慰大姉※			五輪塔							
1688 (貞享5 : 元禄元)	堀尾勝明 (堀尾式部)	發心院殿正山世覺大居士◆										無縫塔

▲印は没年や人物比定が推定

◆印は春光院所蔵「春光院三時回向」に記された戒名

宝篋印塔 伝松田左近墓 石廟は笏谷石 (凡例) 太字：2m

4. 今後の調査研究とそこから紡がれる「ヒストリー」(案)

松江の豊かな歴史文化を描き出すためには、今後地域の調査やテーマに沿った研究を進めて、「ヒストリー」として情報を発信し、活用していく必要があります。今後松江市としてその歴史の特性を生かし、構築していくヒストリーを事例としてあげます。それぞれ調査研究の状況により、深度の違いがありますが、将来紡ぐだろうと考えられるヒストリーも含めて表に列挙します。

ヒストリー	ヒストリーの概要	ストーリー
1) 松江の石をめぐるヒストリー 【視点 1) 交通・交流の拠点 松江】 【視点 7) 地質遺産の宝庫 松江】	松江で産出する石は、先史以来さまざまな目的で用いられ、全国に広がったものも少なくありません。代表は玉湯町花(か)仙(せん)山(ざん)を中心に採集できる玉髓めのう、碧玉と、宍道町来待を中心に切り出された来待石です。他の石材も合わせ、松江と他地域の関わりと時代のヒストリーを紡ぎます	①めのうのストーリー
		②来待石のストーリー
		③様々な石材
2) 水がはぐんだ松江の文化のヒストリー 【視点 3) 水がはぐんだ豊かな 松江】	松江は、北は日本海に面し、中央を東西に中海・宍道湖・大橋川が貫く地質環境、自然環境にあります。海や内海に面した湾には、しばしば潟湖が形成されました。水に囲まれた松江は、歴史の中で様々な形で水にかかわり、水の恩恵を受けてきました。水辺の景観を生かしていくことが、現在のまちづくりのコンセプトの一つでもあります。水に関わる松江の歴史と文化をヒストリーとして紡ぎます。	①先史時代の水上交通・交流のストーリー
		②掘割と湖、川、池のストーリー
		③景勝地 宍道湖のストーリー
		④水害と防災のストーリー
3) 松江南北統合のヒストリー 【各視点】	湖と川が松江を南北に分ける地勢は、分断のように見えて、先史時代から絶妙な地域間関係を保って、広域の中心的役割を担う背景になっていました。分断された南北がどのように地域的統合を果たしたのかは、松江の歴史文化を考える上で重要なヒストリーです。	①旧石器時代 ～南北がつながるストーリー～
		②弥生時代 ～南北それぞれに稲作文化が広がるストーリー～
		③古墳時代 ～南北の地域統合をはたすストーリー～
		④古代・中世 ～制度と土地支配による南北交流のストーリー～
		⑤江戸時代 ～南北に広がる城下町と在郷のヒストリー～
4) ものづくりのヒストリー ～手仕事と産業のはざま～ 【視点 5) ものづくりの伝統が息づく 松江】	私たちの生活の中には、当たり前にものがあふれていますが、それらは歴史の積み重ねの中で、日本の、松江市の文化として次第に成り立っていった物質文化です。その背景には原料を作る人、製品を作る人、運ぶ人、売る人がいて、それぞれに歴史的背景があります。今松江に残るものづくりをヒストリーとして紡ぎます。	①先史・古代のものづくりストーリー
		②江戸時代のものづくりのストーリー
5) 『出雲国風土記』に描かれたヒストリー 【視点 4) 古代出雲文化発祥の地 松江】	『出雲国風土記』は、ほぼ完全な形で伝わる唯一の風土記です。記述された施設や道路などが遺跡として残り、地名や山河なども多くが現実と照合することができます。特に松江市には、出雲国の国府が置かれていたこともあって、記述内容がとても豊富です。遺跡や登場する歴史景観などの可視化を行い、奈良時代の出雲の中心を体感できるようヒストリーを紡ぐことを目指します。	①「佐太国」「閩見国」「三穂埼」「意宇国」のストーリー
		②「カンナビ」と山のストーリー
		③ジオパークと津々浦々・入海のストーリー
		④マツリのみなもとと古社成立のストーリー
		⑤考古資料が語る風土記のストーリー
		⑥温泉と遊興のストーリー
6) 特色ある松江の食と名物のヒストリー 【視点 3) 水がはぐんだ豊かな 松江】	日本列島に伝統的な食文化がある基盤には地域地域の食文化があり、和食としての食文化と相互に関連しながらはぐまれたものと考えられます。松江の風土や気質、歴史文化に基づいた食をヒストリーとして紡ぐことを目指します。	①松江の地域的特色が形作った食の歴史のストーリー
		②『出雲国風土記』の食のストーリー
		③江戸時代の特産品のストーリー
		④国際文化観光都市と名産、お土産のストーリー
7) 町・村などの始まりのヒストリー 【各視点】	現在の松江市内の各町村名や町区域は基本的にはいずれも中世になって新たに成立したもの(中世荘園・国衙領)です。また大字や小字名などの多くも中世に遡ります。町・村の成立のヒストリーをたどることにより、現在の私たちが暮らす居住空間を歴史的に捉えています。	①町・村の成立のストーリー(市内各町・村)
8) 中世松江の交通・交易のヒストリー	中世になると、生産や流通の担い手に専門的な職人や商人が深く関わるようになり、交通や交易のあり方に変化が現れます。松江は日本海の要所に位置するとともに、大きな中海・宍道湖での内海交	①日本海の物流と松江のストーリー
		②中海・宍道湖を介した交通・交易のストーリー

<p>【視点1)交通・交流の拠点 松江】</p>	<p>通を発達させることで、出雲の中で重要な役割を持ち続けます。このような交通・交易がもたらした文化財をつなぎ、ヒストリーを紡いでいきます</p>	<p>③山城から見た交通・交易のストーリー</p>
<p>9)城下町から始まる松江のまちを語るヒストリー 【視点2)城下町 松江】</p>	<p>江戸時代には松江城下町が形成され、更新されてきました。城下町遺跡の発掘調査は、現在の町の下に何層にもわたって整地土があり、中世以降の変遷が追えることを明らかにしました。明治以降、県庁所在地として新たな町が造られていきます。松江城下の変遷と近代以降に残された町並み、建物を追いながら、現在の松江の市街地を形成していくヒストリーを、時代を追って紡いでいきます。</p>	<p>①江戸時代の城下町の変遷のストーリー ②県庁所在地としての松江 近代の町のストーリー ②現在に残る歴史的建造物と記念物のストーリー</p>
<p>10)近代化を遂げる松江のヒストリー 【視点8)国際文化観光都市 松江】</p>	<p>明治維新以降、近代化の波が押し寄せる中でまちは大きく変化し、その痕跡はさまざまなおとに残っています。一方、近世までの文化を継承し、発展させようとしたのも松江の近代の特色と言えるでしょう。現在につながる文化、文化財を中心に、近代化を遂げる松江のヒストリーを紡ぎます。</p>	<p>①インフラ整備—水道と電気のストーリー ②近代教育のはじまりと学都松江の形成のストーリー ③歩兵第六十三聯隊と戦争の記憶のストーリー ④小泉八雲の足跡のストーリー ⑤近世から近代へ—武家文化継承のストーリー</p>
<p>11)暮らしに根づく茶の湯の文化のヒストリー 【視点6)茶どころ 松江】</p>	<p>松江市は、平成30年に茶の湯の文化と産業の基礎を築いた松江藩松平家7代藩主治郷公(号:不昧)の没後200年を迎え、茶の湯の文化と産業を守り、育み、将来へ発展的につなげていくため「松江市茶の湯条例」を制定しました。現在でも松江城大茶会が毎年開催され、多くの来場者を集めています。松江に息づく茶の湯の文化の歴史とその背景をヒストリーとして紡ぎます。</p>	<p>①茶の湯の始まりのストーリー ②藩政とお茶のストーリー ③松平不昧と茶の湯のストーリー ④近代の不昧顕彰と伝統復活のストーリー ⑤松江市茶の湯条例とともに文化をつなぐストーリー</p>
<p>12)地域のストーリーをつないで松江のヒストリーを紡ぐ 【各視点】</p>	<p>松江市は広い市域を持ちながら、地域それぞれが関係し合って長い歴史を歩んできました。松江のヒストリーを紡ぐためには、地域ごとのストーリーを組み立て、関連性を見いだすことで、これまでの歴史文化をさらに奥深く幅広いものとし、さらに新たな松江像(ヒストリー)が見いだせると考えます。それぞれの地域の調査研究を積み重ねて、松江の総合的ヒストリーを紡ぐことを目指します。</p>	<p>各地域のストーリー</p>